

型染——私の伝統工芸体験談

38期生

I テーマ設定の理由

雑誌で型染の作品の写真を見て、その細かな模様の美しさにひかれ、今までほとんど縁がなかった伝統工芸に挑戦してみようと思った。小さい頃、花びらをすりつぶして色水を作り、綿を染めて遊んだことを思い出し、身の回りの植物を使って型染めをやってみて、違った方向から草花に親しんでみようと思った。

II 研究方法

- (1) 家の庭にある草木や、野菜などのうち、色が染められそうなものを採集し、試し染めする。
- (2) 試し染めをした植物の中から、何種類かの植物を選び、それを使って型染の作品を作る。

III 研究結果

〔1〕試し染め

どの植物とどの媒染剤を組み合わせば、どんな色が出るかを調べるために、採集したそれぞれの植物に適した媒染剤を使って、幅35cm、長さ25cm程の絹の布を染めて見た。

——媒染剤とは……—

色素を布によく吸収させたり、発色をよくしたりするために、布に薬品を塗る（または布を薬品に浸す）ことを媒染という。その時に使われる薬品のことが媒染剤と呼ばれる。媒染剤として使えるものには、石灰水・酢・塩化アルミニウム水溶液などがある。同じ植物で染めても、媒染剤が違えば色も違ってくることが多い。

（方法）

- ① 植物を煎じて染液を作る。
- ② 染液の中に布を入れ、約15分間煮染める。
- ③ 布を染液に浸したまま、染液が冷めるまで置く。
- ④ 布を水洗いし、もう一度染液に浸して煮染める。

(結果)

<くちなしの実>

- 無媒染(媒染をしていないもの)——赤味のある黄色
- アルミ媒染(塩化アルミニウム水溶液による媒染)——黄色
- 錫媒染(塩化第一錫水溶液)——黄色
- 酸媒染(酢)——薄い黄色
- 鉄媒染(塩化第二鉄水溶液)——少し黒ずんだ黄色
- 銅媒染(硫酸銅水溶液)——黄色
- アルカリ媒染(石灰水)——黒ずんだ黄色

アルカリ媒染のものが黒っぽい黄色になった他は、目立った違いは現れず、どの媒染剤を使っても黄色系統の色に染まることがわかった。無媒染のものが最も鮮やかに染まったが、色素を布によく吸収させるために、媒染をした方がよいらしい。酸媒染のものが他と比べて薄い色になったのは、染液が少なかったことに原因があると思う。

<玉葱の皮>

- 無媒染——赤味のある肌色
- アルミ媒染——山吹色
- 錫媒染——赤味のある山吹色
- 酸媒染——薄い、赤味のある肌色
- 鉄媒染(木酢酸鉄溶液)——昆布茶色
- 銅媒染——金茶色
- アルカリ媒染——赤茶色

アルミ媒染と錫媒染のものがはっきりした色に染まった。黄色や茶色、肌色などの色の違いが見られたが、どれも少し赤味がかったり。

<紫玉葱の皮>

- 無媒染——肌色
- アルミ媒染——青っぽいレモン色
- 鉄媒染——うぐいす色
- 銅媒染——黄色っぽい茶色

普通の玉葱(皮が肌色のもの)で染めたものと比較しようと思い、皮が赤紫色をした玉葱で染めてみた。するとどの媒染剤でやったものも、普通の玉葱で染めた方が赤味のある色をしている。

<ぶどうの皮>

- 無媒染——明るい紫色
- 酸媒染——薄い紫色
- アルカリ媒染——媒染液に浸した時点では深緑色だったのに、その後再びぶどうの染液に浸すと、暗い紫色になった。

ぶどうは草木染めに使える植物としては文献に載っていなかったが、ぶどうの汁が布巾についたりするとなかなか色が落ちないので、これは染め物にも使えるのではないかと思ってやってみた。しかし、改訂新版の草木染の本にもぶどうは載っていないので、何回も洗濯すると色が落ちてくるなど、実用には向かない点があるのかも知れない。

アルカリ媒染の結果がこの様になってしまったのは、アルカリ媒染された布が、酸性である(PH6)ぶどうの汁の中へ浸されたため、中和してしまい、アルカリ媒染の効き目がなくなったのではないだろうか。

<八重桜の葉>

- 無媒染——しょうが色
- アルミ媒染——たまご色
- 鉄媒染——金色っぽい昆布茶色
- アルカリ媒染——茶味の赤

八重桜で染めたものは鮮やかではないが、柔らかい感じのする色だ。

<柿の葉>

- 無媒染——白っぽいクリーム色
- 錫媒染——薄い黄色
- 鉄媒染——昆布茶色
- 銅媒染——薄い茶色(赤味が少ない)
- アルカリ媒染——白っぽい赤茶色

無媒染のものはほとんど色がついていないよう思えたが、媒染液に浸したとたん、このようなはっきりとした色の変化を示した。八重桜でしたものと、変化が似ている。

<吾木香(われもこう)>

- 無媒染——茶色っぽいクリーム色
- アルミ媒染——薄く、黒ずんだ黄色
- 鉄媒染——少し紫がかった鼠色

- ・ 銅媒染 —— 白っぽい焦げ茶色
- ・ アルカリ媒染 —— 黄土色

<現の証拠>

- ・ 無媒染 —— 茶色っぽい黄色（薄い）
- ・ アルミ媒染 —— 無媒染のものより少し黄色っぽい色
- ・ 鉄媒染 —— 鼠色

<石榴の葉>

- ・ 無媒染 —— 白っぽいベージュ色
- ・ アルミ媒染 —— 薄い黄色
- ・ 鉄媒染 —— 黒
- ・ 鉄とアルカリの併用（鉄媒染をしてからアルカリ媒染）—— 焦茶色

◎ 試し染めを終えて気付いたこと

- ・ たいてい鉄媒染をした時が一番色の変化が激しく、黒っぽい色になる。金属は酸化すると色が変わるから、このことが関係しているのではないだろうか。くちなしの場合も、鉄媒染した直後は黒ずんだ黄色だったので、染液につけると明るい黄色にもどってしまった。だからといって、媒染した後再び染液に浸すことをしなかったら、布に金属が残ってしまい、繊維を劣化させる原因となる。だから、くちなしを鉄媒染するのは、あまりよくないようだ。
- ・ 私が実験した限りでは、アルミ媒染をした時には、どれも黄色っぽい色になった。くちなしはアルミ媒染するように文献に書かれているのも、一層はっきりとした黄色を出すためではないだろうか。
- ・ アルカリ媒染も、はっきりとした色の変化を示した。赤茶色っぽくなつたのが多かった。

(2) 作品に使う植物・媒染剤の決定

- ・ 白ぬきの模様の部分が映える色を出すもの。
- ・ 大量に手に入るもの。
- ・ 濃い染液の出易いもの。（薄い液だと染液を塗る回数を多くしなければならなく、防染用にぬった糊が溶け易くなるから）

これらの条件を満たす植物を選んだ。

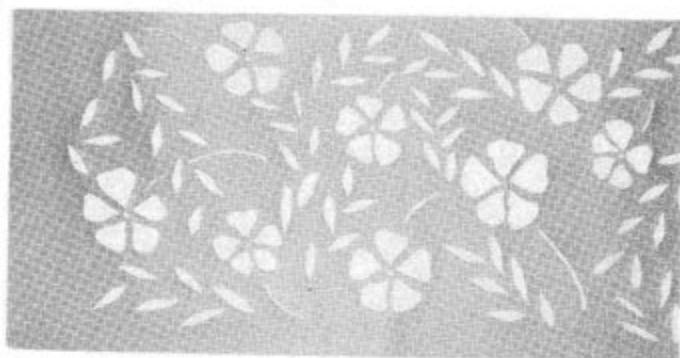
- くちなし（アルミ媒染）
 - 石榴（鉄とアルカリの併用）

同じ型紙を使い、色だけを変えて2枚の作品を作ることにした。

[3] 型染め

1. 型紙を作る

型紙に使う渋紙には伊勢白子を使う。模様を切り抜いた渋紙に、裏からペチコート用の布地をカシューで貼る。



2. 糊糊と石糊（防染用糊）を作る。

糊糊…白玉粉をこねてゆで、ボールに入れて、へらで塊をつぶす。

石糊…糠をふるってボールに入れ、糠が黄色くなる程度に石灰水を加え、ようやくこねることができる程度の硬さによくこねる。その糠に糊糊を加える。

（糠：糊糊=4：6くらい）こねるようによくかき混ぜる。

3. 糊置

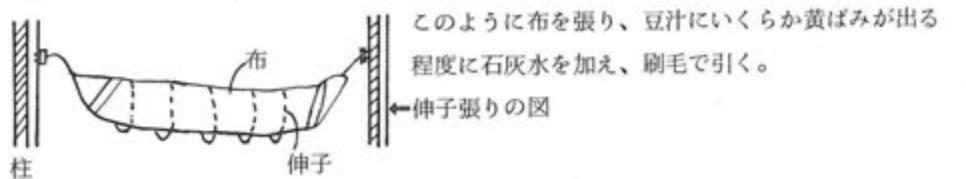
糊糊を湯でゆるめて板にぬり、その上に、布の目が斜めにならないように布を貼りつける。布の上に型紙を置く。型紙の上に石糊を載せ、へらで横に押し出すようにして付けていく。



糊置をした後、型紙を取ってみると、このように糊がついている。この上から染色しても、糊がついていた部分は染まらないで白く残る。

4. 豆汁を引く

豆汁は大豆を絞ったもの。蛋白質を利用して、糊の防染力を強めたり、染料の安定を助けたり、染めむらを防ぐ。



5. 染色

《石榴で染めた場合》

- ① 石榴の果皮で染液を取る。
- ② 布に染液を刷毛で引く。乾いたら、今後は反対の端から引くようにし、6回くらい繰り返す。
- ③ 染液が乾いたら石灰水を引く。
- ④ 石灰水が乾いたら、布を表面にたたみ、水に浸して水を吸収させる。
- ⑤ 布をたたんだまま木酢酸鉄を入れた水槽に浸して、布を手繕りながら媒染する。
- ⑥ 染め上げたい色よりいくらか薄いぐらいの色になら媒染をやめる。
- ⑦ 布を1回水で洗ってから広げ、多量の水に浸す。
- ⑧ 糊が落ちたら布に水をかけながらブラシで洗う。
- ⑨ 乾いたら豆汁を引く。
- ⑩ 豆汁が乾いたら布に新聞紙を挟みながらふんわりと畳んで蒸す。(30分)
- ⑪ 数日置いてから、中性洗剤を湯に溶かした中に浸した後、水洗いして干す。

(結果)

- 糊の作り方が悪かったのか塗り方が悪かったのか、木酢酸鉄につける前に水に浸した時、一部の糊がはがれてしまった。さらに、木酢酸鉄につけると糊は全部はがれてしまった。そのため、模様の所も木酢酸鉄の色になってしまった。
- 木酢酸鉄の濃度が濃すぎて、焦茶色になるはずが黒っぽくなってしまった。
- 白ぬきの模様の部分に網の目の模様が出ている。糊を厚くつけ過ぎるとこうなるそうだ。

一番の問題点は石糊にあると思ったので、石糊を作る時、糊糊の割合をいくらか多目にし、再びやってみた。

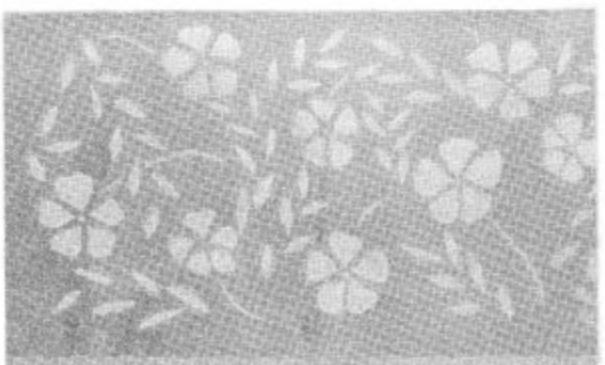
(結果)

糊置の後、型紙を取ると糊がよくついていない部分があった。模様の所には透き間なく塗ったはずなので、これは石糊のせいだろう。糊糊が多いとベタベタするので、ペチコート用の布地の網の目についてしまい、型紙を取る時に一緒に取れてしまうのじゃないだろうか。媒染液に浸してしばらくしたら、また糊がはがれ出した。でも前回より糊がはがれ難かったことから、糊糊の割合は前回と今回の間ぐらいがいいのではないだろうか。石糊を作る時の石灰水の量なども決まっていないらしく、専門家の人も“長年のカン”に頼るしかないそうだ。

《くちなしで染めた場合》

- ① くちなしの果実で染液を取る。
- ② 刷毛で布に染液を引く。(4回ほど繰り返す)
- ③ 塩化アルミニウムの1%液を引いて媒染する。
- ④ 媒染液が乾いたら、また2回くらい染液を引く。
- ⑤ もう一度塩化アルミニウムの媒染液を引く。
- ⑥ 布が乾いたら、布の間に新聞紙を挟み、ふわっとなるように折って、蒸器で蒸す。
- ⑦ 蒸してから1日置いたら、多量の水に浸して糊を落とす。
- ⑧ 水から上げたら、板の上で水をかけながらブラシでよく洗う。
- ⑨ 伸子張りをして干して置く。
- ⑩ 豆汁(石灰水を少し加えたもの)を刷毛で引いて乾かしてから数日以上置く。
- ⑪ 中性洗剤を溶かした温湯に20分間浸した後、水洗いして陽に干す。

(結果)



今回は偶然に石糊がうまく作れ、途中ではがれたりはしなかった。はっきりと濃い色に染まつたので、模様がきれいに浮き出て見える。染めむらもあまりない。これは、豆汁をたっぷりぬったからではないだろうか。だから染めつきがよくなつたが、布がごわごわした感じになつた。

Ⅳまとめ

模様も染め具合もなんとなく優しい感じがする絞り染に対し、型染めの美しさは、くっきりと染め出された模様の輪郭にあると思う。糊作りや糊置の技術が未熟だったために、その

美しさを十分に表現できなかったのが残念だ。昔から「型付三年、糊八年」と言われ、相当な修行がいるようだ。しかし、伝統工芸というと、大変な技術や道具がいるというように思い込み過ぎて、そんな考えが却って伝統工芸を私達から遠ざけていたのじゃないだろうか。時の隔たりを越えて、しかも私達のような普通の人々の間で自然に生き続けてこそ、伝統工芸の意味があるよう思う。

試し染めの時、身近にある植物で色が染まりそうなものを手当たり次第に使ってみたが、これらのうち、ほとんどの物は黄色系統の色も染めた。茶色系の色も多かったようだ。昔は黄色は庶民の色、茶色は普段着の色と言われていた。これは、黄色や茶色を染める植物が、庶民達にも比較的手に入れ易かったからではないだろうか。それでは“位が高い人の色”というのはどういうものか。天武天皇は親王・諸王・諸臣に四十八階の位を定め、位ごとに服の色も決めた。それによると、上位より朱花・深紫・浅紫・深緑・浅緑・深蒲・浅蒲萄の順となっている。草木染めの赤色というのは何とも言えない趣のある色なのだが、近くでは大量に手に入らない植物ばかりが必要なのだ。

V 感想

試し染めでは、文献に書かれている通りの色にならなかつことがたびたびあった。それは「失敗」なのかも知れないが、そんな風にちょっとしたことで染め上がりの色が変わってしまう草木染というものが、とても神秘的に思えた。草木染とは、赤や黄などという、私が知っている色の名前だけでは表現できない色の世界だった。草木染によって“色の贅沢”をしてみるのも、生活を楽しくする工夫じゃないだろうか。

染色の作業に入ると、ほとんど一日中立ったままというのが一番辛かった。私が型染したのは70cm程の布だが、職人さん達はこれを一反も染めるのかと思うと気が遠くなる。しかし、ほんの少しでも職人さんの苦労を知ることができ、いい経験をしたと思う。これをきっかけに、草木染の色を生かして自分だけの作品を作りたい。

(参考文献)

- 「草木染・糸染の基本・浸し染の手法」 山崎青樹 (美術出版社)
- 「改訂新版 草木染・糸染の基本 浸し染の手法」 山崎青樹 (美術出版社)
- 「草木染・型染の基本 引き染の手法」 山崎青樹 (美術出版社)
- 「草木染・木綿の染色」 山崎青樹 (美術出版社)
- 月刊「たくさんのがしご(草や木のまじゅつ)」 山崎青樹 (福音館書店)
- 「理科の自由研究ガイドⅡ」より“草木染の化学” (誠文堂新光社)